

研究科名国際食料農業科学研究科

研究科委員長名高柳 長直

専攻名国際農業開発学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教育課程の編成方針にしたがい、自然科学と社会科学、必修科目と選択科目、座学と実験・演習、フィールド調査などを適切に開設し、体系的に編成している。	各年度に 2 回、専攻の院生発表会を開催し、すべての院生が研究計画発表・中間発表・最終発表をおこなっている。	成績評価および単位認定は各科目の評価責任者が指導実施記録にもとづいて適切におこなっている。学位授与については、院生発表会における最終発表の後で学位論文を審査する判定会議において判定している。	院生発表会におけるプレゼンテーションと学位論文によって、院生の学習成果を適切に把握し、相応の評価を実施している。	研究科のとりくみとして前・後学期に院生による授業評価をおこない、その結果に応じて専攻としての改善計画を研究科に提出している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 自然科学系科目と社会科学系科目を必修科目とすることにより、分野横断的な教育が実現されている。	【長所】 専門分野の異なる教員や院生を前にプレゼンをおこなうことにより、自らの研究内容や研究姿勢を客観的に把握することができる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 他の大学院・専攻にはないマルチディシプリナリーなカリキュラムとなっている。	【特色】 専門分野の異なる教員・院生が一堂に会し、共通のテーマでディスカッションをくりひろげている。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、実験・演習への対応が不十分となっている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、院生発表会に参加できる時間が限られたものとなっている。	【問題点】 各学期の授業終了から成績評価提出までの期間が短く、提出されたレポートなどを評価する時間が十分にとれない。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、院生と個別に対応する時間が相対的に短くなっている。	【問題点】 本専攻は全院生のほぼ半数を留学生が占めているが、院生による授業評価は日本語のも対応の学生ポータルを通じておこなわれるため回答率が低い。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針（大学 HP 公開）	①修士論文発表会要旨集	①修士論文発表会要旨集	①修士論文発表会要旨集	②授業アンケート結果にもとづく改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	年 2 回の入試でそれぞれ入試説明会を実施するとともに、ウェブなどを利用して過去の入試問題を公開するなど、学内外からの受験者に配慮した説明をおこなっている。入試においては各専門分野からの出題と英語問題の出題など、分野横断的な教育方針に沿って筆記試験を実施している。口述試験は専攻内の全指導教員が担当し、各専門分野の観点から試問をおこなっている。また、留学生の増加に対応して筆記試験・口述試験とも日本語・英語のバイリンガルで実施している。	年 2 回の院生発表会でのプレゼンテーションで、院生の研究に対する取り組みを評価している。また個別の問題に関しては必要に応じて専攻会議でとりあげ、専攻教員間で情報共有を図るとともに、改善策を随時検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針（大学 HP 公開） 大学院入試募集要（大学 HP 公開） 入試過去問題（大学 HP 公開）	①2021 年度修士論文発表会要旨集

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各専門分野(研究室)に指導教授を配置し、院生の研究指導にあたっている。授業においては指導教授に加えて指導補助教員・授業担当教員を配置し、教育・研究活動を展開するための適切な教員組織を編成している。	教員の募集、採用、昇任等は大学の規定に沿って適切に行われている。	教員の資質向上は基本的に個人の努力に帰すべきものであり、専攻としては各教員が研究や自己研鑽に十分な時間を割けるよう、組織的かつ多面的な配慮をおこなっている。	教員組織の適切性について、随時検討が行われている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、研究や自己研鑽に割ける時間が十分とれていないのが現状である。	【問題点】 なし。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針（大学 HP 公開） 大学院案内（大学 HP 公開）	③教員年齢構成	③教員年齢構成	③教員年齢構成	③教員年齢構成

学部・研究科名国際食料農業科学研究科

学部長・研究科委員長名高柳 長直

学科名・専攻名農業経済学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業経済学専攻では、具体的なカリキュラムポリシーとして、以下のように定めて教育課程を編成している。 （１）「農業経済学、農政学、食料経済学を基幹科目として配当し、修士論文作成のために、問題意識の醸成や研究方法・調査技術の修得が行えるよう特論および演習を必修科目として配当する」。これに対して、農業経済学、農政学、食料経済学の各特論を配置し、大学院生はそれぞれの研究領域に関係の深い特論を履修するよう指導している。 （２）「指導教授または指導准教授や論文指導教員以外の多様な研究方法や研究視点を学べるよう選択科目を配当する」。これに対し、上記の特論科目のうち、それぞれの研究領域以外の科目を、研究計画や関心に応じて履修できるようにしている。 （３）「プレゼンテーション能力や議論の能力を高めるため、必修科目として総合演習を配当する」。これに対し、具体的科目として、特別演習Ⅰ～Ⅳ（博士前期課程）および特別研究指導Ⅰ～Ⅲ（博士後期課程）を開設し、研究指導と定期的な発表会によるプレゼンを一体として行っている。 （４）制度的な枠組みを学ぶため、農業	入学時および進学時の４月にガイダンスを行い、大学院生としての心構え、必要な手続きなどを説明している。 大学院生の研究室をサイエンスポート 7 階に 2 室設置し、それぞれ学生どうしで交流が図れるようにしている。	成績評価について学生が説明を求める場合は科目担当教員が面談等を行う。 旧カリキュラムの総合演習の評価及び学位認定については、専攻全教員が参加する専攻委員会で判定している。総合演習の評価および、博士前期課程の学位認定については 2023 年 2 月 6 日の第 8 回専攻委員会で行った。	農業経済学専攻では、博士前期課程では、食料、農業、環境の農業経済学的側面にかかわる知識、農業経済学および関連分野において、研究者、教育者あるいは専門家として活動しうる能力、図表を効果的に利用しながら文章での確に表現して、情報発信する能力等をディプロマポリシーに掲げている。博士後期課程では、農業経済学の専門領域における高い専門性を保証する国際的なレベルでの高度な知識、体系的に情報を整理し、論理的思考に基づく研究能力、食料問題・農業問題・環境問題等の解決に向け、リーダーシップ能力等を掲げている。これにもとづき、前期課程については、修士論文の中間報告会を 4 回、最終報告会を 1 回開催している。後期課程については、博士論文の中間報告会を 4 回、最終公開報告会を 1 回開催している。これらは、博士論文最終公開報告会以外は、「総合演習」という名称で開催される。このなかで、指導教員以外の教員から、多角的にアドバイスを得ながら、必要な知識・能力・態度を身につけられるようにしている。さらに後期課程の最終学年においては、主査・副査予定者による審査・指導のチーム体制を作り、上記の項目水準を満たせるよう指導体制を整えてい	学生に対するアンケートに基づき、点検・評価を行うとともに、改善計画を立てて、向上を図っている。

	法に関する科目を配当する。これに対し農業法Ⅰ・Ⅱを開設している。 なお、新カリキュラムが再編後の研究室体制とうまく連動できていないという問題があった。これについて、専攻のカリキュラム検討委員会および専攻委員会において検討した結果、これまでの農業経済学、農政学、食料経済学という3つの柱の特論を、農業経済学、フードシステム論、食料環境経済学の3つに再編し、1つの特論が2つの研究室に対応するようにする。すでに研究科としても決定済みで、2024年度にその体制となる予定である。			る。	
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 農業経済学に関連した幅広い分野を学ぶことができる。	【長所】 1科目あたりの受講生が少ないので、受講生に合わせてきめ細かな授業を行っている。	【長所】 総合演習の評価・学位認定については、合議に基づいており公平である。	【長所】 なし	【長所】 少人数で学生一人ひとりに応じた指導が可能となっており、比較的学生の満足度が高くなっている。
	【特色】 なし	【特色】 受講生に合わせて、英語または英語・日本語のバイリンガルでも授業を行っている。	【特色】 日本語のほか、英語での修士論文・博士論文の提出を認めている。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 新カリキュラムが再編後の研究室体制とうまく連動できていない。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 専攻のカリキュラム検討委員会および専攻委員会において検討を進める。	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	大学院農業経済学専攻の3つのポリシー等（専攻資料1） 学生便覧（専攻資料2） 3つの柱の特論と教員配置・経済学科研究室の対応関係（専攻資料3）	なし	第8回専攻委員会--資料2「総合演習の成績に関する件（専攻資料4）	「総合演習」計画表（専攻資料5）	教育評価の結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書（専攻資料6）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業経済学専攻博士前期課程では、具体的なアドミッション・ポリシーとして、経済学に関する基本的な学力、専門領域における知識や研究方法の基本的な学力、日本人は英語、外国人は日本語の基本的な語学力、食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し、博士前期課程の学力試験については、基礎的科目・専門科目として、経済学・農業経済学・農政学・食料経済学から2科目を選択、語学については英語又は日本語から選択できるようにし、外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は、英語又は日本語から選択可能としている。また、専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲を判断している。博士後期課程については、専門領域における知識や研究方法、第二言語として英語または日本語のより高度な運用能力、研究資料を得るためにコミュニケーション能力を有するとともに、それらを緻密に整理できる能力、食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって率先して問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し、学力試験については、専門科目として、農業経済学・農政学・食料経済学から1科目を選択、語学については英語又は日本語から選択できるようにし、外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は、英語又は日本語から選択可能としている。また、専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲のみならず、修士論文等の作成状況などを問うことで、受験生の能力を判断している。 学生募集については年2回説明会を開催し、アドミッション・ポリシーを用いながら、とくに外部からの進学希望者については丁寧に説明している。 個別の学力試験の採点結果は複数の教員が確認するとともに、専攻委員会で公正に選抜している。 なお次年度からは、専門科目について、食料環境経済学科の研究室に対応した科目に変更する予定であり、より学科の教育との連動性を高める効果が期待できる。	専攻委員会で入試科目やアドミッション・ポリシーの適切性について点検・評価を行い、数年に1回の割で改善を図っている。 今年度の専攻委員会での議論に基づき、来年度からは、入試の専門科目について、食料環境経済学科の研究室に対応した科目に変更する予定であり、より学科の教育との連動性を高める効果が期待できる。 現在、学生の在籍者数は定員を満たしていないが、反面きめ細かい指導が可能となっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 留学生や社会人の受験希望者が比較的多い。	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 受験生の数が定員よりは少ない傾向が継続している	【問題点】 なし
	【課題】 内部進学者を増やすために、学部のゼミや研究室を通じて、大学院進学の具体的なイメージを持ってもらうことが必要である。	【課題】 なし
根拠資料名	試験実施要領（第3回専攻委員会—資料1）（専攻資料7） 入試説明会資料（専攻資料8）	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教員組織の編制として、下記のような方針を定めている。 本専攻は以下の要件を満たす教員で組織する。編制にあたっては、国際食料農業科学研究科（農学研究科）の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業・食料・環境の諸問題に対して経済学をはじめとした社会科学の手法を用いて多様な研究・教育を展開する研究室体制と社会科学の特性を踏まえた教育体制を構築し、その維持・向上に努める。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「3つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業経済学や関連社会科学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	農業経済学専攻は、国際食料情報学部食料環境経済学科に所属する教員で構成している。食料環境経済学科は 6 研究室で編成され、母体となる各研究室原則として 3 名の教員で構成されている。令和 4 年度は、指導教授 9 名、指導補助教員 3 名、授業担当教員 1 名となっており、男性 10 名、女性 2 名である。 食料環境経済学科 6 研究室のうち前年度は欠員になっていた研究室も新規の教員が着任し、6 研究室 18 名の教員が揃った。農業経済学専攻所属となっていない若い教員まで含めて、18 名全員による院生指導体制を作っている。	新規教員の募集・採用については、食料環境経済学科と一体的に行っている。募集はすべて公募によって行い、本学および科学技術振興機構のホームページ等で公募情報を公表している。採用・承認については、大学の基準に従い、専攻委員会で審議を経て公平かつ適切に行っている。この方法により、食料環境経済学科に 1 名の教員が着任し、農業経済学専攻所属となっていないが院生のサポート教員として院生指導に加わってもらっている。 また、昇任に関しては、食料環境経済学科所属教員でこれまで専攻に所属していなかった教員 3 名について、専攻内での審議を経て、2023 年度より新たに指導補助教員として専攻メンバーに加わることを決定した。	各研究室の中で指導教授などが新任教員や若手教員にアドバイスをを行い、資質向上を図っている。また、全学的に行っている FD フォーラム、公的資金の利用管理に関する講習会、ハラスメント講習会などに各教員は参加し、資質向上を図っている。	教員の研究室体制については、時代の変化や研究・教育上の効果を鑑みて、数年に一度、関係教員全員で検討を行い、研究室の再編を行ってきた。 これに関して、食料環境経済学科の研究室体制と専攻の柱の特論がうまく連動できていないという問題があった。これについて、専攻のカリキュラム検討委員会および専攻委員会において検討した結果、これまでの農業経済学、農政学、食料経済学という 3 つの柱の特論を、農業経済学、フードシステム論、食料環境経済学の 3 つに再編し、1 つの特論が 2 つの研究室に対応するようにする。すでに研究科としても決定済みで、2024 年度にその体制となる予定である。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 上記の専攻の教員組織の編制は定められているものの、大学の web ページ上には明記されていない（学科の教員組織の編制は、大学の web ページ上で見	【問題点】	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】

	ることができる)。				
	【課題】 各専攻の教員組織の編制を大学の web ページ上に明記することが必要ではな いか。	【課題】	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】
根拠資料名		学生便覧（専攻資料2）			3つの柱の特論と教員配置・経済学科 研究室の対応関係（専攻資料3）

学部・研究科名国際食料農業科学研究科（農学研究科）

学部長・研究科委員長名高柳 長直（馬場 正）

学科名・専攻名国際アグリビジネス学専攻（国際バイオビジネス学専攻）

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	国内外の食・農・環境ビジネスに関する専門科目を配置している。 講義内容のシラバスへの反映、15 回開講の確実な実施している。 休講時の補講を適切に実施している。 最先端研究の知識などを得るため、不定期に外部講師による講義を実施している。	調査・研究能力の向上を図るため、学期ごとに中間報告会等（後学期には全学の大学院研究発表会に全員参加）を実施ししている。 柱科目の演習を必修科目として設置し、きめ細やかに指導している。 柱科目の演習では論文指導のみならず、対外発表の指導も行っている。	成績評価と単位認定は、国際食料農業科学研究科の評価基準に従って実施している。 学位授与は、原則として全教員が参加する学位論文報告会を開催し、相対評価的要素を加味した総合評価に基づく審査および完成論文審査により行っている。 中間報告会等を実施している。	専攻主任、主事がシラバスチェックを行い DP との整合性をチェックしている。 各学期において、指導教員が学生の取得単位数と成績内容を把握している。 中間報告会等を通じて、個々の学生の総合的な研究能力を把握している。 指導教授が就職相談を実施している。	新研究科のもとで新専攻の教育体系を向上・改善するための科目・授業内容について個々に検証を行なっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 食・農・環境ビジネスの理解やその調査・研究に必要な知識や能力が身につく。	【長所】 調査・研究能力の向上に加え、プレゼンテーション能力が身につく。	【長所】 成績評価、単位認定及び学位授与の客観性が保たれている。	【長所】 中間報告会等における教員評価を院生にフィードバックし、総合的な研究能力の向上に努めている。	【長所】 新研究科への移行を契機に改革を進めた教育課程の総合的な検討を行うことができる。
	【特色】 ゼミ形式による少人数教育で、個々の大学院生に応じたきめ細やかな教育を行っている。	【特色】 日本語のみならず英語での報告・質疑応答もあり、国際性の向上に寄与している。	【特色】 全員の論文、報告内容、発表について点数化し、その結果をもとに成果を評価している。	【特色】 特になし。	【特色】 教員配置とカリキュラム、教育計画などを長期的視野のもと点検・評価し検討できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 コロナ災禍のため一部の海外現地調査が制約された。	【問題点】 コロナ災禍のため研究の進捗が芳しくなかった一部の院生がおりフォローが必要だった。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 特になし。	【課題】 特になし。	【課題】 国内・国外の会議における研究発表を推奨するよう指導する。	【課題】 特になし。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム（学生ポータル参照）、◆①大学院学生便覧、◆大学院シラバス（学生ポータル参照）、◆②専攻会議資料、◆専攻 3 ポリシー（大学院 HP 参照）	◆③④第 1 回・第 2 回中間発表会報告要旨（表紙のみ開示）	◆③④第 1 回・第 2 回中間発表会報告要旨（表紙のみ開示）、◆⑤⑥第 1 回・第 2 回中間報告の評価	◆専攻 3 ポリシー（大学院 HP 参照）	◆②専攻会議資料

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学生募集や入試にかかわる情報は Web ページにおいて公開しており、全受験者に公正に提供している。また、願書提出方法や奨学金情報にかかわる詳しい説明、さらには個々の志願者の質問への回答などのため、願書提出前に専攻単位の入試説明会を定期的に開催し、学生募集・入学者選抜における公平性を担保するための取り組みを実施している。 入試過去問題の公表、入試問題作成の内規の整備、口頭試験内容の標準化を専攻独自にルール化し、公正な入学者選抜に努めている。 海外現地入試など多様な入試を検討している。	JICA 奨学生、ABE イニシアチブ、特別留学生など留学生の受け入れを積極的に行っている。 学生の適性について、個々の学生の評価・適性を専攻内で共有し、定期開催する報告会にて相互に点検・評価し、問題点の把握と改善を検討している。 一般入試のみならず、国際協力経験者入試、社会人入試、秋入学など多様な入試制度の受け入れを行っている。 留学生を中心に、学外の奨学金獲得に向け、応募書類作成の支援や推薦書作成を行っている。 日本人学生の大学院進学が少なかったことから、学部の日本人学生の進学指導を強化したところ、多くの大学院進学者が確保できた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 指導教授との進路相談などを通じて、研究計画策定など入学希望者の事前準備を重視している。	【長所】 個々の学生と緊密に連携し学生受け入れの改善に努めている。
	【特色】 博士前期課程入試においては英語の試験を TOEIC に置き換えるなどし、公正な入試選抜を行っている。ただし、2022 年度は TOEIC 受験が間に合わない学生がいることが予見されたため、英語試験を別途実施した。	【特色】 学生指導では、指導教員と指導補助教員からなる複数教員による教育指導態勢を採用している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 推薦入試導入の検討が必要である。	【課題】 学外奨学金を積極的に獲得するよう指導する。
根拠資料名	◆②専攻会議資料、◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試過去問題公表 HP、◆専攻 3 ポリシー（専攻 HP 参照）	◆②専攻会議資料、◆③④第 1 回・第 2 回中間報告会報告要旨（表紙のみ開示）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	指導教授による専攻委員会を不定期に開催し、指導教授推薦など教員組織編制の方針を確認し必要に応じて改善している。 学科や学部で教員募集を行った場合、常に大学院担当について意識しながら専攻人事の方針を決定している。	学部改組に伴い教員数が減少するなか、柱科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど適切に編制している。 研究室単位でバランスの取れた年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は学科教授会および専攻会議にてはかり、指導教授により構成される専攻委員会にて適切に審議している。	研究室単位で合同ゼミを行うなど、若手教員の FD 向上がみられる。 専攻独自に FD 研修会などは開催していないが、積極的に学内の FD 講習会に参加している。 授業評価アンケートに取り組むよう、学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに点検・評価することを奨励している。 教員の研究業績、社会活動については、自己点検システムへの積極的な反映を促している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針に基づき、英語で指導できる教員数が増えた。	【長所】 研究科再編で専攻教員が減少したが、継続して多彩な科目を提供している。	【長所】 研究室ごとに指導教授が存在し、研究室ごとに募集・採用・昇任を検討できる。	【長所】 特になし。	【長所】 特になし。
	【特色】 英語で研究指導するなど、国際性が向上した。	【特色】 英語で指導可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 すべての研究室が英語指導に十分対応できておらず、留学生の研究室選択に偏りがある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭に した教員配置計画を策定する。	【課題】 大学院指導教授資格者を増やす必要がある。	【課題】 特になし。	【課題】 若手教員の研究力向上のため、海外 依命留学を計画する。
根拠資料名	◆①専攻教員配置表（大学院便覧）、 ◆大学院教員名簿（大学院 HP 参照）	◆①専攻教員配置表（大学院便覧参照）、 ◆大学院教員名簿（大学院 HP 参照）	◆①専攻教員配置表（大学院便覧参照）	◆②専攻会議資料 （合同ゼミ実施実績については、1 研究室が毎週 1 回実施した）	◆②専攻会議資料

学部・研究科名国際食料農業科学研究科

学部長・研究科委員長名高柳 長直

学科名・専攻名国際食農科学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	国際食農科学専攻では、具体的なカリキュラムポリシーとして、以下のように定めて教育課程を編成している。 （１）研究科共通科目として配置する必修科目の「研究倫理特講」により、研究者として備えておくべき倫理を身に付ける。 （２）また基礎科目である「論文英語」、「プレゼンテーション法」において、学術研究をまとめるため必要な技法及び報告の方法を学ぶ。 （３）「食農技術学」と「食農経済学」において自然科学と社会科学の両基礎領域を学び、さらに、「植物生産学特論」、「食環境科学特論」、「食農政策特論」、「食農教育特論」といった特論科目を履修し、専門領域に対する理解を深める。これらの科目を履修することにより、研究能力及びリーダーシップ能力を修得させる教育課程を編成している。	入学時の４月にガイダンスを行い、履修の仕方などの必要な手続きを説明している。新たに大学院生の居室をサイエンスポート 6 階 (S635) に整備した。	成績評価については、レポートや授業態度・個別報告などを通じて適切に行っている。複数教員のオムニバス科目についても教員同士で確認を行い、適切に評価を行っている。院生が説明を求める場合は科目担当教員が面談等を行うようにしている。	国際食農科学専攻では、①「農業生産」、「食品科学」、「食農政策」、「食農教育」などの自然科学・社会科学にわたる国際食農科学の確かな知識を有し、②国際食農科学において研究者、高度専門家、教育者として活動し得る能力、③国際食農科学にかかわる研究を遂行する能力、④専門性を活かし、国内外における食や農にかかわる諸問題を解決する能力等をディプロマポリシーに掲げ、学生の学習成果を把握・評価している。	大学院生に対するアンケートの結果に基づき、点検・評価を行うとともに、改善計画を立て教員間で情報の共有を図り、向上を図っている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 自然科学および社会科学の観点から食農技術学と食農経済学に関連した幅広い分野を学ぶことができる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 院生の人数も少なく、院生との距離が近い ため、院生の要望を聞くことができる。

2022（令和 4）年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	【根拠資料②】設置の趣旨等を記載した 書類	なし	なし	【根拠資料②】設置の趣旨等を記載した 書類	【根拠資料①】2021F 授業評価アンケート結果

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	国際食農科学専攻修士課程では、具体的なアドミッションポリシーとして、国際食農科学に対する深い理解の上に、専門分野における基礎的な問題を自立的に解決できる人材を育成し、以下のような学生を求めている。 ①国際食農科学の当該分野における学修が可能な四年生大学修了程度の学力を有している。②国内外における学修や研究活動を可能にする基本的な語学力を有している。③豊かな学びと人間関係の構築を可能にするコミュニケーション能力を有している。④国際食農科学の発展への貢献に強い関心，研究者，教育者あるいは専門家として社会に貢献しようとする明確な問題意識と学修に対する強い意欲を有している。 学生募集については年 2 回説明会を開催し，アドミッション・ポリシーなど PowerPoint を用いながら，進学希望者に対して丁寧に説明している。 また，学力試験については専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲や能力を判断している。	専攻の全教員で入試科目（英語科目・専門科目）やアドミッションポリシーの適切性について点検・評価を行い，改善を図っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	【根拠資料②】設置の趣旨等を記載した書類 【根拠資料③】入試説明会 PowerPoint	なし

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき, 教育研究活動を展開するため, 適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集, 採用, 昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し, 教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また, その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教員組織の編制として, 下記のような方針を定めている。 国際食農科学専攻は以下の要件を満たす教員で組織する。編制にあたっては, 国際食料農業科学研究科の教員組織の編制方針を踏まえ, 教育研究上の目的を達成するため, 主要となる専門領域を定め, それぞれに研究指導教員を配置する。また, 教育研究水準の維持向上及び教育研究の活性化を図るため, 教員の構成が特定の範囲の年齢に著しく偏ることのないよう配慮している。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」, 「教育目標」及び「3つの方針」を十分理解し, それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 国際食農科学分野における高い研究業績を有するとともに, 本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	国際食農科学専攻は, 国際食農科学科に所属する4研究室の教員で構成している。各研究室原則として3名の教員で構成されている。令和4年度は, 指導教授6名, 指導補助教員4人, 授業担当1人となっており, 男性7名, 女性4名である。専攻では, 適切に教員組織を編制している。	新規教員の募集・採用については, 国際食農科学科と一体的に行っている。募集はすべて公募によって行い, 本学および科学技術振興機構のホームページ等で公募情報を公表している。採用・承認については, 大学の基準に従い, 専攻委員会で審議を経て公平かつ適切に行っている。	指導教授などが若手教員にアドバイスをを行い, 資質向上を図っている。また, 全学的に行っているFDフォーラム, 公的資金の利用管理に関する講習会, ハラスメント講習会などに各教員は参加し, 資質向上を図っている。	教員の研究室体制については, 研究・教育上の効果を鑑みて, 学科会議で検討を行い, 研究室の教員再編を行ってきた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 研究室体制と試験科目, 特論科目が連動している。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし

現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	【根拠資料②】設置の趣旨等を記載した書類	【根拠資料②】設置の趣旨等を記載した書類	なし	なし	なし

研究科名 国際食料農業科学研究科
研究科委員長名 高柳 長直
専攻名 国際農業開発学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	自然科学および社会科学にわたる広範な学問領域を統合する総合的アプローチにより、農業開発や国際協力にかかわる問題の解決を図るための論理的な思考力と実践力を持つ	異なる文化や習慣を尊重した活動を展開できる人材を育成する	国内外の農業開発ならびに国際協力分野でリーダーシップをもって活躍できる人材を育成する
実行サイクル	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施 スケジュール	自然科学と社会科学の両領域で、それぞれ基幹となる必修科目を履修し、総合的な知識を修得するとともに、農業開発や国際協力にかかわる諸問題や研究手法について学ぶことを目的とし、各研究領域をカバーする座学科目および実験・演習科目ならびにフィールド調査を選択科目として履修する。	他国の文化・社会・習慣などの多様性に十分な知識と理解を有し、柔軟な思考力と判断力、さらにコミュニケーション力を身につけ、演習・実験を通して国内外のどの地域でも自己の能力を発揮して社会に貢献することができる能力を養う。	インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などを実施し、国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在としてリーダーシップを発揮できる能力を養う。
目標達成を測定する指標	カリキュラムの実施状況	専攻の全指導教授または指導准教授が出席し、発表者に対してコメントや意見を述べる専攻内研究発表会の開催状況。	インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などの実施状況。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	すべてのカリキュラムを適切に実施した。	院生発表会（英語でのプレゼン資料作成が必須）を2回実施した。	国内外におけるフィールド調査やインターンシップに複数名の院生が従事した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 幅広い科目を配したカリキュラムにより、総合的かつ実践的な大学院教育を実施できる。	【長所】 院生発表会では英語での発表と質疑応答がおこなわれ、国際的なコミュニケーション能力が習得できる。	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 コロナ禍で特に海外でのフィールド調査やインターンシップに制限があり、実施した学生が少なかった。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	大学院シラバス	①修士論文発表会要旨集	④インターンシップ、フィールド調査実施報告書

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	国内外の農業・農村開発の現場におけるさまざまな問題解決に貢献する課題解決型研究の推進	農業・農村開発を通じて国際的に活躍する人材を育成するため、国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施	国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在として活躍する人材を育成するため、地域・社会と連携した研究活動の実施
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（2018 年～2022 年）	____ 4 ____ 年サイクル（2018 年～2022 年）	____ 4 ____ 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施 スケジュール	学内外の競争的資金を獲得し、研究プロジェクトを実施する。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究を実施する。	地域・社会と連携した研究を実施する。
目標達成を測定する指標	研究プロジェクトの実施状況。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施状況。	地域・社会と連携した研究活動の実施状況。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻教員の多くが競争的資金を獲得し、研究代表者・研究分担者・プロジェクトマネージャーなどとして研究課題を遂行している。	複数の専攻教員が連携研究を実施している。	複数の専攻教員が国内外の地域・社会との連携を伴う研究活動をおこなっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	⑤教員の研究活動	⑤教員の研究活動	⑤教員の研究活動

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	地域社会と連携した取り組みを推進する。	民間企業などと連携した取り組みを推進する。	
実行サイクル	_____4____年サイクル（2018 年～2022 年）	_____4____年サイクル（2018 年～2022 年）	_____年サイクル（平成_____年～_____年）
実施 スケジュール	地域社会と連携した取り組みを実施する。	民間企業などと連携した取り組みを実施する。	
目標達成を測 定する指標	地域社会と連携した取り組みの実施状況。	民間企業などと連携した取り組みの実施状況。	
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻教員が地域社会と連携した取り組み（地域民間包括連携活動）を行った。	専攻教員が民間企業と連携した取り組みをおこなった。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・
根拠資料名	⑥教員の社会的活動	⑥教員の社会的活動	

学部・研究科名 国際食料農業科学研究科
学部長・研究科委員長名 高柳 長直
学科名・専攻名 農業経済学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院生が的確かつ体系的に情報を整理する能力と論理的思考能力を醸成するため、博士前期課程の特別演習Ⅰ～Ⅳ、博士後期課程の特別研究指導Ⅰ～Ⅲの一環として、年間5回の総合演習（研究中間報告のプレゼンを行う研究会）を実施し、教育力の向上を図る。		
実行サイクル	_____1年サイクル（令和4 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	第1回特別演習の実施（6月） 第2回特別演習の実施（7月） 第3回特別演習の実施（11月） 第4回特別演習の実施（12月） 第5回特別演習の実施（1月）		
目標達成を測定する指標	①各特別演習の報告資料		
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	5回の総合演習（研究中間報告のプレゼンを行う研究会）を予定通り実施した（年度途中の休学者を除く）。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・なし	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	「総合演習」計画表（専攻資料5）		

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農業経済学専攻では、大学院生が社会科学の専門領域における知識と研究能力を修得することを目標としており、各専門領域の学会で、教員との共同研究を含め研究発表や学会誌への投稿を行い、研究力の向上を図る。		
実行サイクル	_____1年サイクル（令和4年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	各専門領域の学会発表・学会誌への投稿（随時）		
目標達成を測定する指標	大学院生の学会発表、学会誌投稿・受理の状況		
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	2022年度は、農業経済学専攻所属大学院生の対外的研究発表として、査読付き論文2本、学会報告5本、学術書籍3本があった。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・なし	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	2022年度農経専攻所属院生の論文・報告_改訂（専攻資料9）		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	近年、農業経済学専攻では入学者が少ない傾向にある。博士前期課程、博士後期課程ともに、入試受験者確保に向けて努力する。		
実行サイクル	_____1年サイクル（令和4 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	第1回大学院入試説明会の実施（5月） 1期入試等（7月） 第2回大学院入試説明会の実施（12月） 2期入試等（1月）		
目標達成を測定する指標	①各入試説明会の参加者数 ②各入試受験者数		
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	入試説明会は、予定の2回について開催した。第1回は参加者5名（博士前期課程が5名、博士前期課程が0名）、第2回は参加者2名（博士前期課程が2名、博士前期課程が0名）、であった。入試の志願者数は、1期入試では博士前期課程が5名（うち1名は10月入学）、博士後期課程が0名であり、2期入試では博士前期課程が3名、博士前期課程が0名であった。これ以外に、特別留学生入試の受験者が1名（博士前期課程）あった。 志願者数は前年比で、博士前期課程が5名増、博士後期課程が同数である。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・一般に文科系では大学院進学の特長が少ないものと考えられているため、理科系と比べて大学院生募集の面でハンデがある。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・研究に打ち込めること、スキルアップが望めることなど、大学院の魅力学部学生に周知していく必要がある。	【課題】 ・	【課題】 ・

根拠資料名	入試説明会資料（専攻資料 8） 1 期入試志願者数（専攻資料 10） 2 期入試志願者数（専攻資料 11）		
-------	---	--	--

学部・研究科名 国際食料農業科学研究科（農学研究科）

学部長・研究科委員長名 高柳 長直（馬場 正）

学科名・専攻名 国際アグリビジネス学専攻（国際バイオビジネス学専攻）

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院の講義における成績の相対評価化 （将来的な GPA 導入の環境整備）	AP/DP に適合した大学院生の研究・プレゼンテーション能力の向上
実行サイクル	4 年サイクル（2021 年 ～ 2024 年）	4 年サイクル（2021 年 ～ 2024 年）
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策（改善点）の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会（中間・最終）の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、新たな研究・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施
目標達成を測 定する指標	①相対評価を実施する教員数（比率）	①全教員のプレゼンに対する改善コメント記入割合 ②参加学生の満足度評価
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生が海外の大学院に進学を希望する場合、GPA の提出を求められることがある。このため、将来的には大学院に GPA を積極導入すべきであると考え、大学院教学検討委員会における GPA 検討結果を踏まえ、導入を進めているところである。	専攻で実施している中間報告会および最終報告会においては、大学院生の報告についてレジュメの完成度とプレゼンの出来に分けて評価をしているほか、コメントを積極的にフィードバックする取組を行っている。また、大学院生が在籍する全ての研究室で、研究成果を定期的にプレゼンテーションさせるなど、プレゼンテーション能力の向上を意図した指導を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 博士前期課程の最終報告会を審査し、審査結果に基づき必修科目の成績付けに際し、相対評価的要素を加味している。	【長所】 プレゼンテーション能力の向上は、修士・博士論文の質向上への影響もさることながら、社会に出た後、様々な場面で活用可能である。
	【特色】 博士前期課程の最終報告会を学位取得のための最終口頭試験と位置づけ、院生の奮起を促している。	【特色】 日本語のみならず、英語によるプレゼンテーション能力の育成に努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 在籍院生数が少なく、演習科目も多いため、すべての科目で相対評価を実施することは困難である。	【問題点】 専攻独自の学生満足度調査については、実施に至っていない。
	【課題】 引き続き GPA 導入拡大の方策を検討する。	【課題】 大学で実施している教育課程満足度調査との重複が想定されるため、専攻独自の満足度調査については実施の必要性を再検討する必要がある。
根拠資料名	◆①大学院カリキュラム（学生便覧）、◆大学院シラバス（学生ポータル参照）、◆⑦最終報告会要旨集、◆⑧最終報告会評価結果 相対評価を1科目以上で実施した教員数16人（100%）、	◆プレゼンに対する改善コメント記入割合（16名中11名＝68.7%） ◆①大学院カリキュラム（学生便覧）、◆大学院シラバス（学生ポータル参照）、◆③④第1回・第2回中間報告会要旨集、◆⑤⑥第1回・第2回中間報告会の評価集計結果

2. 研究に関する総合的事項		
	①	②
目 標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	アグリビジネス分野を対象とした研究成果の対外公表
実行サイクル	____4____年サイクル（2021 年 ～ 2024 年）	____4____年サイクル（2021 年 ～ 2024 年）
実施 スケジュール	<u>①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への応募可能性の確認</u> <u>②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定</u> <u>③制度への申請準備支援</u> <u>④制度への申請</u>	<u>①学会等における研究報告の促進</u> <u>②研究成果の論文化の奨励</u> <u>③成果の取りまとめと社会化</u>
目標達成を測 定する指標	<u>①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率</u>	<u>①研究成果の学会報告数</u> <u>②論文投稿数</u> <u>③商業誌等への掲載による成果の社会化</u>
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	2022 年度は有資格者 8 名中 7 名が応募・申請し、採択者となった。7 名の採択は他専攻と比較しても多いと言える。コロナ災禍のため、海外における調査研究、海外の学会発表等は大幅に制限を受けたが、当研究支援制度を活用した研究の進捗が見られた。	2022 年度においては、積極的な研究活動が行われた結果、学会報告数 11 件、論文投稿数 5 件など堅調な業績を上げることができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 今年度は当制度への申請を促進したこともあり多くの課題が採択され、成果が上がった。	【長所】 専攻外研究者との共同研究により、院生の研究活動の活発化など好影響が確認できる。
	【特色】 海外調査や大規模アンケートなど費用のかかる研究の促進に大いに役立っている。	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 コロナで入国できない院生および国内にいても未申請の院生が存在する。	【問題点】 専攻教員の大半を巻き込む形での外部資金等を活用した研究計画立案には至っていない。
	【課題】 応募数を一層増やすため、指導教授からの助言が必要である。	【課題】 外部資金等を活用した研究計画立案のための勉強会を継続的に開催推奨していく必要がある。
根拠資料名	◆応募者数比率（7 名／8 名＝87.5%） （応募者は全員、採択者となった）	◆学会報告数 11 件、論文投稿数 5 件、商業誌等への掲載 0 件。

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	国際アグリビジネス学専攻教育課程の検証	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目等の活用と進路指導の強化
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（2021 年 ～ 2024 年）	____ 4 ____ 年サイクル（2021 年 ～ 2024 年）	____ 4 ____ 年サイクル（2021 年 ～ 2024 年）
実施 スケジュール	<u>①現行新規教育課程の評価と問題点の抽出</u> <u>②国際バイオビジネス学科の教育課程改革（2024 年度新カリキュラムの策定）との関係性の検討</u> <u>③上記①と②を踏まえた専修分野の効果検証</u>	<u>①大学院生の生活実態の把握</u> <u>②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集</u> <u>③大学院生（＋入学予定者）への奨学金申請の促進</u>	<u>①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定とそれに向けた具体的計画を策定させる。</u> <u>②インターンシップ科目の受講とチャレンジワークショップへの積極的参加を指導する。</u> <u>③適宜、指導教員による進路相談を実施する。</u>
目標達成を測定する指標	<u>①大学院生の教育課程満足度調査結果</u>	<u>①学外奨学金応募者数</u> <u>②奨学金応募者に占める奨学金受給者割合</u>	<u>①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数</u> <u>②大学院生向けチャレンジワークショップの実施有無</u>
自己評価 （ ☒ を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	2022年度は国際アグリビジネス学専攻としての2年度目を迎えたが、教育課程に混乱もなく、「国際化や技術革新、消費者志向の多様ななど、変化に直面するアグリビジネスの実態について経営学の手法を用いて探求する」という教育目標の実現に向けて進展が見られた。	博士前期課程については大学院進学時（入学前）に外部の奨学金に応募するよう指導した。日本人学生は応募していないが生活基盤が確立しているためと思われる。	2022 年度については、マスター1 年生、ドクター2 年生に対して、就職・進路情報の継続的な情報提供を積極的に進めた結果、4 名のインターンシップ参加があったほか、新たにチャレンジワークショップに参画した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 留学生の奨学金応募は、学生生活の安定に寄与する。	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 留学生が積極的に応募している	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 奨学金については採択が必ずしも多くない。 留学生の中に、長期にわたり連絡がつかない院生がいた。	【問題点】 留学生については、就職希望の実態把握が困難である。
	【課題】 特になし	【課題】 日本語による書類作成のフォローアップ体制ができていないため、指導教員の負担が大きい。サポート体制の構築が今後の課題である。	【課題】 留学生については帰国か日本で就職かの決断が遅いケースがあり、インターンシップの検討ができていないことが課題である。
根拠資料名	◆①大学院カリキュラム（学生便覧）	◆奨学金応募者数 8 名（9 件）、うち採択数は 5 名（6 件）	◆インターンシップ参加者数 4 名 ◆チャレンジワークショップ実施有（JICA）

学部・研究科名 国際食料農業科学研究科
学部長・研究科委員長名 高柳 長直
学科名・専攻名 国際食農科学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	自然科学および社会科学にわたる広範な学問領域を統合する総合的アプローチにより、国内外に存在する食と農に関する課題の解決を図るための論理的な思考力と実践力を持つ		
実行サイクル	2 年サイクル（2021 年～2023 年）	年サイクル（ 年～ 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	自然科学と社会科学の両領域で、それぞれ基幹となる必修科目を履修し、総合的な知識を修得するとともに、食と農の課題を解決に導く実践力と論理的思考能力について学ぶことを目的とし、各研究領域をカバーする座学科目および実験・演習科目を選択科目として履修する。		
目標達成を測定する指標	（1） 院生による授業評価 （2） 特別演習の報告資料		
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名	根拠資料① 根拠資料②		

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	専門領域における知識と研究能力を習得することを目標とし、各専門領域の学会で、教員との共同研究を含め研究発表・学会誌への投稿を行い、研究能力の向上を図る。		
実行サイクル	2 年サイクル（2021 年～2023 年）	年サイクル（ 年～ 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	各専門領域の学会発表、学会誌への投稿		
目標達成を測定する指標	各専門領域の学会発表、学会誌投稿の状況		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	2022 年度学会発表： ①依田萌他「都市住民における子どもの食育の現状と意識に関する考察」実践総合農学会 ②西澤南他「パッションフルーツの成熟前落果発生機構に関する研究Ⅳ - 果実へのオーキシンおよびエチレン生成阻害剤散布が落果に及ぼす影響 - 」日本熱帯農業学会 ③増田悠花「アブラナ属野菜の新たな種子活力試験開発に関する研究 - 老化程度の測定による長期貯蔵に耐えるカリフラワー種子の選抜 - 」日本熱帯農業学会 ④澤村碧他「沖縄県低利用農作物における AMPK 活性化因子の検索」日本食生活学会 ⑤安田直也「ビタミン K によるアポトーシス誘導の分子機構の解析」日本食生活学会 ⑥堀池友乃「欧州モデルを参考にした日本の新たな食品表示システムの提案に関する調査・研究」日本食生活学会 学会賞： 増田悠花 日本熱帯農業学会学生優秀口頭発表賞		
現状説明を 踏まえた	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】

長所・特色	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化	
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（2021 年～2023 年）	_____ 年サイクル（ ____ 年～ ____ 年）
実施 スケジュール	（1） <u>大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、具体的な計画を立てさせる。</u> （2） <u>インターンシップの科目受講とインターンシップへの積極的な参加を指導する。</u> （3） <u>適宜、指導教員による進路相談を実施する。</u>	
目標達成を測 定する指標	<u>就職希望学生に対するインターンシップ実施者数</u>	
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】
根拠資料名		